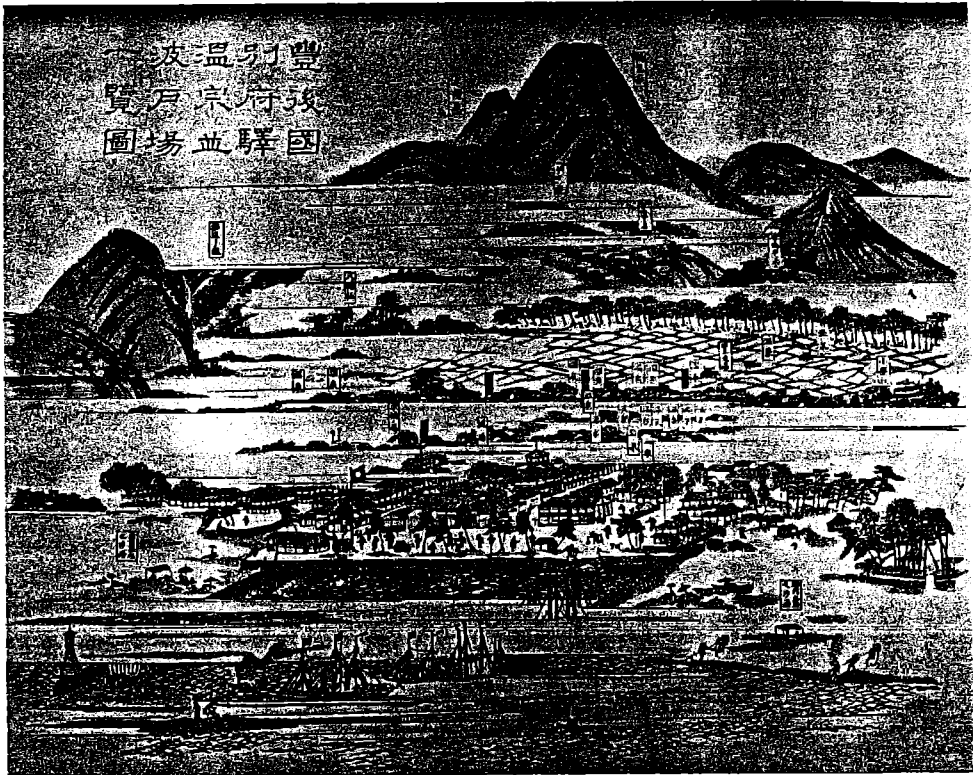


# べっふの文化財 No.3

## 主な内容

- 金銅製唐草文透彫鏡板
- 笠塔婆 と 国東塔
- 郷土の歴史 石垣原合戦
- 千辛万苦之場
- 文化財一覧表・地図



豊後国別府温泉並波戸場一覽図（郷土資料室蔵）

別府市教育委員会  
別府市文化財保護委員会

大分県文化財専門委員・別府市文化財保護委員 賀川 光夫

「魏志東夷伝」の倭人の記事に、「無牛馬虎豹羊鶴」とある。しかし日本における野馬の存在は、縄文、弥生時代に認められる。しかし遺物の上で馬具と見做されるものの発見は、古墳時代後半に至ってからである。後期古墳には、馬具副葬の風潮が急激に盛行した。だが古墳出土の馬具は有機質の腐蝕などもあって全容を知ることができぬが、これを埴輪馬と対比すれば、多くは儀式用の馬であった。馬具は技術的にも大陸よりの輸入で倭人にとって貴重品であり、財宝であって、特別の場合にのみ使われていたであろう。

馬具は、鞍金具、鐙、轡、革金具、辻金具、垂飾などに分類される。轡は銜（はみ）引手、鏡板からなる。轡は、馬の口の中に入る部分が銜、その左右両端にあるのが鏡板で、わが国には、S字形をしたスキタイ風のものがあるが注目される。板の中央に穴を設け、銜を通じて上端に紐通しを一個設けて面繫（おもがひ）と結ぶ。鏡板には文様をほどこして装飾を重視するが、同じような形態のものに、三繫の垂飾具の一つ杏葉（きょうよう）があって、流麗な文様を誇る。

別府市大字北石垣実相寺山麓一帯には大小多数の古墳群が存在した。鬼の岩屋、

1-2号墳は、後期古墳の代表的横穴石室の主体部をもち唯一の保存された古墳である。一号墳の一部から馬具の金具類が多数発見され、それがすべて金銅製であったことなど注目される。

太郎、次郎古墳といわれる二つの古墳址が、実相寺山麓の古代公園内の一帯にある。この二つの古墳址は、封土の一部が存在しているが、幾度となく発掘され、その都度遺物が散逸したものと推定される。

附近に舟形石棺の半分が存在しているのは鷹塚古墳の主体部に安置されたものの一部と考えられる。そして太郎、次郎古墳も鷹塚古墳附近一帯に、古墳期（6世紀・7世紀頃）の遺物が散乱して発見される。太郎、次郎塚の封土の基部にも、古代公園造成のさい須恵器や、瓦器が多数発見され、6世紀から8世紀頃までの遺物が混在して出土した。このことから、太郎、次郎古墳が再三にわたって発掘され、その際発見された遺物のうち、土器片などが瓦溜の状態に残存封土の一部に

存在した。こうした状態で「金銅製唐草文透彫鏡板」2個が発見された。したがって、この鏡板が6世紀から8世紀頃までの間に比定されることは確かであるが、太郎塚造成の6世紀頃の遺物とすれば施文された唐草文様の本邦最古式のものとして注目される。

太郎塚発見の鏡板は、銅地板に唐草文様の透彫をあてそれを外縁心臟形をした金具で鋳留（びょうどめ）したもので、縦6櫃、巾10櫃の楕円形を呈し、主文様は四区に分かれて唐草が配置される。中央には楕円形の孔があって銜（はみ）先と引手の結節がおこなわれたとみられる。銅地に金箔をかけ華麗な仕上りをみせている。

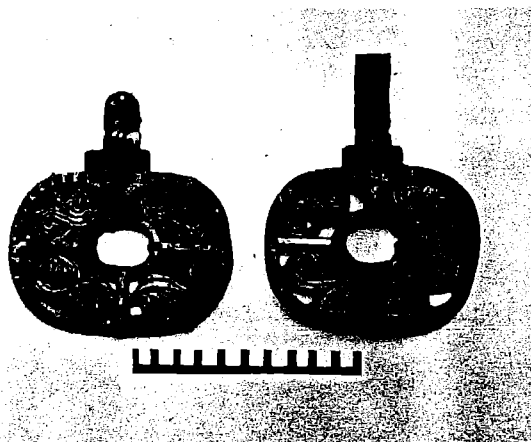
ことに唐草文様がわが国において盛行したのは飛鳥時代で、法隆寺を中心とする当時の遺品にこれを見ることが出来る。太郎塚出土の鏡板の唐草文様も雄健なる手法で作られ、これが舶載品であるうたがいが残こされる。すなわち7世紀において法隆寺を囲む工人の一群はいざしらず、地方の古墳にこの優れた文様をもつ工芸品があることを考えれば、それが中国六朝芸術の影響であることは充分考えてよい。同じような唐草文様をもつ工芸品として、馬具の垂飾具、杏葉に類例が多い。群馬県新田

郡狐塚古墳、茨城県新治郡出土の杏葉は、太郎塚古墳出土の鏡板に彫刻された唐草文様と大同小異である。九州では福岡市席田出土の杏葉にも類似している。

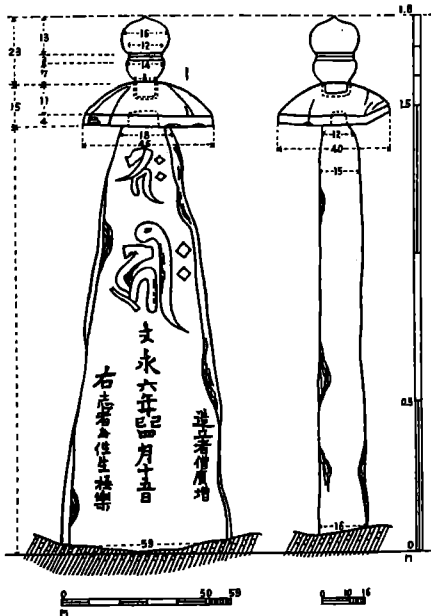
唐草文様が中国古代に流行したのは六朝芸術であり、その風習は隋、唐の時代にも盛にうけつがれた。もし、太郎塚古墳の鏡板にみえる唐草文様が、その雄健なる手法を六朝に求められるとすれば、わが国唐草文様の工芸資料として貴重である。

また7世紀頃の遺物（須恵器・瓦器）と時代をとるとすれば、法隆寺を囲む工人と同じく、当時の埴化技術者の手になる工芸資料とみることが出来る。そうすれば、法隆寺の前進、若草伽藍の軒先瓦の瓦当（がとう）面の唐草文様に類似するところが多い。この点は太郎塚古墳の築造と併せて興味深い。

（別府大学 教授）



▲ 鏡 板 2



徳永邸笠塔婆立面図

徳永邸・笠塔婆立面図

県重文に指定された

## 笠塔婆と国東塔

大分県文化財専門委員 入江英親

昭和46年度に本県の指定した大分県指定重要文化財のうち、石造の建造物が23基を占めているが、そのうち2基は別府市内に所在するものである。この2基については、別府市立図書館長佐藤村夫氏の依頼により昭和46年7月31日と、8月1日の両日、佐藤館長及び別府市文化財保護委員後藤武夫両氏の協力をえて、指定申請資料作成のための調査を行った。幸い申請した2件とも重要文化財として指定されたので、この機会に市民の皆様にご紹介させていただくことにした。

### 〔1〕 徳永邸 笠塔婆

- 1. 名称及び員数 笠塔婆 1基
- 1. 所在地 大分県別府市西野口町5-30
- 1. 所有者 大分県別府市西野口町5-30  
徳永常一郎

#### (1) 所在地

国鉄日豊線別府駅の西出口から山の手にて徒歩約5分で野口病院横を経て、住宅街の徳永常一郎邸に達する。

この笠塔婆は同氏邸の庭園内にある。なお同氏は笠塔婆の外に、国東塔、宝篋印塔、五輪塔、板碑等々の石造美術品を多数集められている。

### (2) 構造形態

塔身・笠・請花・宝珠からなり、基礎の施設は別段見受けられない。塔身は前面を削平してあるが、他の3面はほとんど加工のあとではなく自然のままである。そして下部は大きく、上部にゆくにしたがって次第に細まっている。塔身の頂部には柵が造り出され、これが笠にうがった孔にはまるようになっている。笠は円形に近いもので、宝珠と請花とは一石からなっている。

### (3) 大きさ

総高 180cm 塔身の高さ143cm、幅は下部59cmで上部にゆくほど細く、最上部は18cm、頂部に高さ4cmの柵がついている。側面下部の幅は16cm、上部は15cmでほとんど同じ厚さであるが、最上部は急に細まって12cm程度である。

笠は円形に近く、まんじゅう笠を思わせ、その高さは15cm、巾は46cm、軒口の厚さは4cmあまりである。

請花の高さは7cm、下部の径は8cm、上部の径は14cm、括り目の厚さは3cm。

宝珠の高さは13cmで、径は下部12cm、上部の最も大きいところで16cmとなっている。

### (4) 銘文

正面上部にバク(釈迦)、その下方に大きくキリク(弥陀)と種子が薬研彫りされている。その下方に

大正六年四月十五日

右左衛門佐藤常一

徳永邸

と、中央に大きく年号が陰刻され、向って左側に造立の理由、向って右側に造立者名が小さく陰刻されている。

### (5) 石材

硬質の輝石安山岩が使用されている。



▲ 笠塔婆

(6) 造立目的

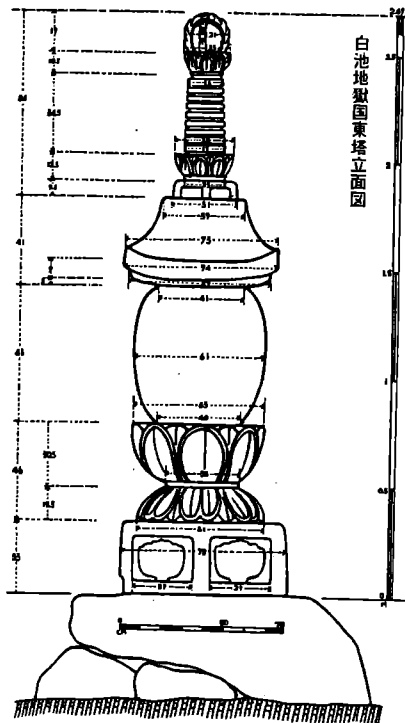
刻銘に「造立者僧廣増」「右志者為往生極楽」とあることよって、僧廣増の造立目的が生前供養にあったことが明らかである。

(7) 結語

この笠塔婆と同種のものが豊後高田市田染の富貴寺境内にあり、去る昭和40年3月9日に、大分県指定重要文化財に指定されている。実はこの笠塔婆も、富貴寺より約2 Kmばかり隔った陽平部落の農家の庭にあったものであるが、福岡県に搬出されようとしているところを田染の庭師を通じて購入した由である。美術的に見ても、富貴寺境内所在のものに決しておとるものではない。

また造立者銘は「阿仏房廣増」とか単に「廣増」とのみであるが、この方には「僧廣増」と「僧」の文字が追加されている点は価値が高い。それはともあれ、刻まれた文字は実に雄渾であり、達筆である。しかも造立は鎌倉中期の作という時代の古さである。別段繊細な技巧を加えたものではないだけに、素朴な中に気品があり、水墨画を思わせるものがある。県内には数少ない笠塔婆ではあり、しかも製作技術の優秀さは最上位に属するものである。永く後世に伝える上からも、是非とも県指定の重要文化財として指定し、保存すべき要があるものと思われる。

(II) 白池地獄 国東塔



白池地獄・国東塔立面図

- 1. 名称及び員数 国東塔 1基
- 1. 所在地 大分県別府市鉄輪283-1
- 1. 所有者 大分県別府市鉄輪283-1 加藤知孝

(1) 所在地と所有者

国鉄日豊線別府駅に下車、表出口から海岸に向って徒歩約10分で北浜に達する。国道をはきんで海岸よりに亀の井バス本社があるが、ここから鉄輪(かなわ)行きバスに乗車すれば約25分で終点到着する。白池地獄はここから徒歩約3分の地点である。国東塔は白池地獄の構内になつている。所有者は白池地獄の所有者加藤知孝氏である。

(2) 構造形態

地獄観覽通路に接した巨石の上に立った完形のものである。基礎は方形の一重であるが、最初この塔の造された際は、恐らく二重または三重だったと推定される。現在は下の巨石が初重の役をなしている。何れにしても現在の基礎は方形の一重で一石からなっている。四面ともに縦に2区に分かたれ、各区画内に格挾間が形よくきざまれている。

台座は反花と蓮花座とからなり、それぞれ一石できざまれており、括り目は蓮花座に付いている。反花は複弁の8弁で、蓮花座は単弁の8弁である。共にのびのびと盛り上った蓮弁で、恰好がよい。

塔身は一石からなり、上下の径はほとんど同一の大きさで、中央が多少膨らんだ円筒形をなしている。国東塔の塔身上部には、首部がつき、首部の下方に小孔をうがち、塔身内部の穴洞に通じているのが普通であるが、この国東塔はその首部を欠いている。眞玉町所在の国東塔に首部を欠いた実例はあるが、この場合は首部に代わる円形の台輪が載せられている。この国東塔にも、恐らく台輪が載せられていたものではあるまいか。

笠は一石からなり、平面は方形で照屋根である。軒口は2重となっているが、下方の分は極を現わしたものである。

相輪は露盤・請花・九輪・請花・火焰のついた宝珠からなっている。露盤は笠の上部に刻み出すのが普通であるが、この国東塔は露盤も加えて相輪が一石からなっている。露盤は上部が下部よりややせまい截頭方錐形で、その四面は2区に分れているが、各区内には格挾間も、れん子も刻まれていない。請花の反花は単弁の8弁、また宝珠の下の請花の反花も単弁の8弁である。宝珠は四方を火焰でかこまれている。

(3) 大きさ

大きさは大体次の通りである。(実測図参照のこと)  
総高 …………… 2 m 69 cm



▲ 国 東 塔

- 基礎……………高さ33cm、 巾79cm  
 台座……………総高46cm  
 反花……………厚さ15.5cm 下端径61cm 上端  
                   径36cm  
 蓮花座……………厚さ30.5cm 下端径36cm  
                   上端径63cm  
 塔身……………高さ63cm 下端径40cm  
                   中央径61cm 上端径41cm  
 笠……………高さ41cm 軒口厚さ9cm  
                   軒口巾74cm 椽厚さ3cm  
                   椽巾69cm 笠上部巾39cm  
 相輪……………総高86cm

- 露盤……………高さ7.5cm 巾(下部)31cm  
 請花……………厚さ12.5cm 径(下部)23cm  
                   (上部)28cm  
 九輪……………厚さ2.5~2cm 径19~16cm  
 請花(宝珠下)……厚さ10.5cm 径(下部)14  
                   cm(上部)23cm  
 火焰……………高さ19cm 巾(宝珠)21cm

(4) 石 材

角閃石安山岩が使用されている。

(5) 結 語

これだけの国東塔にして刻銘の見られないのは、墨書銘でもあったものかと思われる。また前記の通り塔身の首部を欠き、基礎も一重または二重を失っているのに、多少釣合いの点に不満はあるが、巨石の上に置かれているので、とくに目苦しさを感ずるわけではない。優美な格挟間、潑刺とした清楚な台座、整った相輪、枯淡の味いをかもし出す笠の流れや軒口の優雅さ。全体的に感ずる洗練された美しさは、鎌倉時代以前に造立されたものではないことを私共に物語ってくれる。恐らく鎌倉時代の武張った強い力の美に、更に磨きをかけて固苦しさを取除いた吉野時代の製作かとも思われる。いずれにしても祖先から受けついで来た貴い文化遺産であるから、永く後世に伝えることは、所有者は勿論のこと、現代の人人にかせられた責務ではなからうか。そういう見地からしても、是非大分県指定の重要文化財として指定すべきではあるまいか。

なお保存のためには、地獄の湯気にさらされては風化剝脱を早める結果となるので、風向きの悪い現位置から移動の必要が痛感される。また基礎の補足や、塔身首部の代りの台輪をおくことも願わしい。

因にこの国東塔は、大正の頃国東方面から購入して庭園の飾りとしてあったもので、昭和の初め、現所有者の加藤氏が譲り受けて此处に移した由である。

(大分県教育委員会 文化課勤務)

## 郷土の歴史 『石垣原の合戦』について

別府市文化財保護委員 安 部 巖

(一) 歴史的背景とその意義

慶長五年(1600)といえば、オランダ船リーフデ一号が豊後に標着し、乗組員アダム・スミス(三浦安針)が徳川家康に用いられた年であり、豊後におけるキリシタンは、その数1500、野津に教会がたてられ、困難

な情勢の中で、牧師達はキリシタンの布教に全力を投入したが、キリシタンに対する嵐がようやくふきあれようとした時代であった。

この年を国内政治の面からみれば、豊臣秀吉の死後三年目、朝鮮征伐の余波もようやくおさまろうとした時期ではあるが、豊臣方(西軍)の宿将石田三成の率いる7

万5千と、徳川方およそ10万の大軍が、美濃の関ヶ原で雄雌を決し、徳川方の勝利におわり、天下の形勢が徳川方に移った年であり、内外共に物情騒然、戦国大名の間においては、好むと、好まざるとにかかわらず、帰属の決定が強いられた年でもあった。

この年石垣原では、豊臣方大友義統と、徳川方に組した黒田如水との間に、その命運をかけた決戦がおこなわれた。

勿論義統は、約400年(1196-1600)豊後を支配した大友氏第22代の守護大名であり、父は、キリシタン大名として知られた大友宗麟であったが、義統は、文祿の朝鮮征伐で、秀吉の怒りにふれ、毛利氏に預けられていたが、豊臣方の請に応じ、吉弘統幸・宗像掃部・田原紹忍以下少数の軍兵をひきつれ、豊

後浜臨に上陸し、立石村(当時高千石)古屋園に布陣した。

一方、黒田如水は、幼時萬吉、のち官兵衛と稱し、名は祐隆、のちに孝隆・孝高と改め、入道したが、後入道して如水と号す、石垣原合戦以前は、播磨姫路の城主であり、もと赤松家の被官であったが、父職隆のとき織田信長に通じ、その幕下となった、その後豊臣氏の幕下となり各地に軍功をたて、その功により天正15年(1587)7月豊前国六郡を拜領し、中津城におり、12万石を支配し、天正17年家を子長政にゆずり、入道して如水と号す、時に年44、其後朝鮮の役に出陣、役後徳川方に通じたが、如水は、軍師としても政治家としてもすぐれた戦国の猛将であり、機を見るに敏であった。この黒田如水は、き下の軍兵を突相寺山に布陣させ、石垣原の荒涼たる原野で、関ヶ原合戦に先んずる2日前、命運をかけての合戦がおこなわれたが、その歴史的意義はきわめて大きい。

それを更に詳細に記せば、その第一は、石垣原合戦に端を発する九州諸勢力の掃すうは、関ヶ原合戦以後における東軍の活動に好えいきょうをあたえ、ひいては、徳

川幕府の江戸開府にえいきょうをあたえたことである。

慶長5年9月13日(1600)午後6時、大友方吉弘統幸、宗像掃部の戦死によって、石垣原における大友氏の敗北は決定的となり、九州東北部一帯における政治上の実権が、黒田方のものになったことは、九州支配の権力が徳川方にうつったことを意味する。

このことは、単に九州における豊臣勢力が敗退したと

言うだけでなく、2日後におこなわれた関ヶ原合戦における豊臣方の軍兵や、九州各地に散在する戦国大名ならびに大友浪人の志気に大きなえいきょうを与えたことはいなめない。

第二には、九州における中世から近世への開幕がこの戦いを契期として展開したと考えてよいであろう。

近世の開幕については、種々学説があるが、内田銀蔵博士は、日本近世史で、

元和元年(1615)豊臣氏の滅亡を以てし、黒板勝美博士は、関ヶ原合戦を以てした。その何れにせよ、九州における近世史は、大友氏の敗北、石垣原合戦の終結を以て開幕したと考えることができるのではあるまいか。つまり、この合戦は、大友氏が敗北したというだけでなく、九州における近世への開幕と同時に、日本史における近世史への序幕であったと考えてよいであろう。

更に第三に、この合戦は、黒田氏をして、江戸時代を通じ、九州における大大名としての地位を確保させ、逆に豊後国に小藩分立の政治体制をしく要因になったといえることができよう。

以上簡単に石垣原合戦の歴史的意義について記したが、要約すれば、この合戦は、一地方の局地戦ではなく、日本史の流れの中で、政治体制の変革に大きなえいきょうを与えた合戦であったといえることができよう。



▲ 黒田如水 (NHK大分放送局提供)

(註)

- ①半田康夫著 「大分県郷土史年表」昭和28年、
- ②全書
- ③豊後石垣原軍記・武徳安眼諸家大秘様
- ④広池長良編「吉弘統幸公伝」昭和22.5.10
- ⑤黒板勝美著「国史の研究」366頁
- ⑥黒板勝美著「国史の研究」367頁
- ⑦黒田如水は、後福岡城主となり、筑前52万石を与えられる(郷土の歴史九州編)

## (二) 石垣石古戦場と遺跡

さきに記した如く、日本史の上で重要な意味をもつ石垣原合戦がおこなわれたのは、別府市の海岸よりほぼ中央、日豊本線亀川駅と、別府駅の間より西側に広がる台地で、地理学上石垣原台地(扇山扇状地)とよばれるが現地では、単に石垣原とよび、最近住宅化しつつある地域で、その中央部には、実相寺山熔岩からなる角殿山・実相寺山・実相寺南丘陵からなる山塊があり、風光明媚の台地で、東は、国際観光港・別府湾をへだてて四国佐田岬・豊後水道・佐賀関半島を望見し、西側には、速見火山群の主峯鶴見嶽(1375メートル)があり、南方には、東から高崎山(628.2メートル)・鏡瓶峠・吉備山・立石山・耳取山・小鹿山などの山々が西にむかってのびているが、別府市街地との間は、朝見川断層線によってくぎられている。一方北側は、実相寺山を頂点として、なだらかに傾斜するが更に北方は、十文字原から東方にのびるかなごえ断層線を望見することができる。

次に台地の周辺には、浜脇・別府・朝見・乙原・観海寺・南立石・鶴見・鉄輪・明ばん・野田・竈・亀川・石垣などの集落があるが、いずれも温泉観光地として、近代的に脱皮し、全体的に連けいをたもちながら、観光都市別府の住宅地、観光地として発展の途上にある。

石垣原合戦が展開した古戦場は、この台地中央から南西方の地域一帯、即ち実相寺山と、朝見川断層崖上の立石との間にひろがる礫まじりの草原であるが、最近の都市発展のえいきょうでその相ぼうは、変化の一途をたどっている。以下、この地域に残る遺跡の概況について記してみたい。

●吉弘統幸墓地——別府市南石垣吉弘、吉弘神社裏山にあり、墓地の中央に統幸墓、その後方に石殿(細川家寄進)があるが、統幸墓は巨大な板碑型であるが、附近に産する自然石(安山岩)を使用している、この墓については、石垣原合戦後宝泉寺の住僧や村民によって供養され、墓碑が建立されたとつたえられており、宝泉寺に製蔵する位碑には、

(表) 捐館統雲院殿榮勝運英大居士神儀

(裏) 慶長五年九月十三日石垣原戦死

大友義統公家老吉弘嘉兵衛尉統幸事

と記されている。なお、吉弘統幸墓地は、西国東郡金宗



▲ 吉弘統幸

院境内、東国東郡永泰寺境内などに存するも、その詳細については、ここでは省略する。

●吉弘神社……寛永9年、肥後細川氏は、肥後の領主として熊本城に入るが、その頃、吉弘正久は細川公に仕え、細川氏の援助のもと吉弘石殿を墓地に寄進した(広池長良氏による)もようであるが、この石殿には、細川九曜の紋、統幸軍旗紋などがぎざまれている、現在の社殿は、大正11年建立された。

●実相寺山……実相寺山・角殿山は、黒田方の陳跡である、石垣原大友義統と黒田如水取合いには

「黒田如水様、同13日、鶴見村に御着被成……松二井佐渡守殿は、実相寺山に御控へ、以上人数3千余騎、屋形様御勢、以上9百余騎、同日巳の刻より酉の刻迄二御合戦之由承伝候」と記されている。

●大友方本陣……大友方の将、義統の本陣は、南立石(元立石)本村、古屋園におかれ、右翼陣は、その東方坂本(観海寺杉乃井ホテル東側)におかれ、吉弘統幸が統率、左翼陣は、西方御堂が原におかれ、宗像掃部が統率した。

陣地について、石垣原合戦之次第覚には、

「9月9日、豊後国浜脇浦に着船、同日夜五ツ時立石江御入陣、即本陣立石邑古屋園……吉弘嘉兵衛者同村坂本ト云ニ陣ヲ居、則有合之農家ヲ陣家トス、一、宗像掃部者同御堂ノ原ト云ニ陣ヲ居、是茂有合之農家ヲ陣トス」

と記されている。

此本陣のおかれた古屋園の柱は、吉弘神社に残されており

「石垣原合戦大友本陣柱、慶長5年9月9日、義統本陣を、古屋園に定む、この樺（けやき）断片は、当時の建物の一部なり。分割半分を石垣村吉弘神社に贈る」と記された遺物がある。

●石垣原古戦場……古戦場については、さきにその概略を記したが、その地域には大友こしかけ石。（屋形石）忠内ヶ堀（忠内は人の名力）などの遺跡がある。大友こしかけ石は、大友義統がこの石上で采配をふったといわれ、屋形石ともいわれていたが、今は、その姿を見ることはできない。忠内ヶ堀については、元禄7年4月の石垣原古戦場見取図に

「忠内ヶ堀、カラホリ、横三間、長サ百余間」と記しその南側に

「井上九郎エ門・吉弘嘉兵衛戦戦ノ所、

- ・久野治左エ門討死ノ所、
- ・曾我部五右エ門モ此辺ニテ討死ス、
- ・口与三兵衛、時枝平太夫此辺マテ夾敗軍ス、
- ・明攀トル島アリ、」

と記されているが、古戦場については、

「鶴見原、石垣原トモ云、此原東西八鶴見山

ノフモトヨリ、海辺マテ一里余南北ハ立石ヨリ実相寺山マデ25町アリ、此所、慶長5年9月13日、黒田如水公の先手大友義統ノ兵ト合戦ノ地ナリ」

と記されており、実相寺山・角殿山附近については、

「慶長5年9月13日晚、如水公御陣所、松井佐渡、右吉四郎右エ門陣所、吉弘嘉兵衛御墓」

等と記されている。

●宗像掃部墓地——大友方左翼陣を守った宗像掃部の墓地で、大友本陣の北側150米の地点にあり、破損した五輪塔・石殿などがあるが、石殿は、後世になって造立されたものであり、ここに残る五輪塔が掃部の墓ではないかと考えられる、現墓地は、後世になってうつされたものであり、もとは、下段の敷地であった。

以上、石垣原古戦場に残る遺物の2、3について記したが、その外に関係遺跡として、松山陣、浜脇港・杵築城・安岐城 など数多く残っているか今は省略する。

### (三) 史料

この紙面で、史料の全部をかかげることはできない、ために、2、3の軍記史料のみについてのべてみたい。

●豊後石垣原軍記——原本は、もと速見郡石垣村（別府市石垣）若松屋伊藤甚三郎旧蔵のものであるが、これは、表紙に、「慶長五庚子年、豊後石垣原軍記、菊

月13日之事也」とあり、奥書きに「慶長五庚子年11月日、元治元年、子九月日書之、伊藤親右エ門五拾九才、老之乱筆見苦候、北石垣村若松屋、伊藤甚三郎」とあることから、元治元年（1864）に伊藤親右エ門が、筆写したものであることはあきらかであり、縦21.5糎、横17.0糎の書級本である。

●石垣原合戦之次第覚事——原簿は、別府市南立石本村、元庄屋家、古屋氏の襲蔵するものであり、表紙に「慶長五庚子年9月、大友立石、黒田実相寺山陣、石垣原合戦次第覚事、久我四郎三郎」と記され、表紙、裏表紙共10枚の小冊である。

●武徳安眠諸家大秘録——石垣原合戦が収載されているのは、後偏の二、武徳安眠記の附録にあたる部分で石垣原合戦を中心に、九州、四国の室町末期から、江戸初期に亘る動乱の様相を克明に記したものであり、豊臣氏から徳川氏に勢力がうつりかわる時期の武將の動行、なやみ、当代の風潮などを詳に知ることのできるものであるが、特に石垣原の合戦については、その前後における事情などをも詳に知ることができ、当代の大分県地方史研究には、貴重な史料であると言うことができよう 尚此の書は、縦21.1糎、横15.7糎の和本、すみ書きで表紙は紺色の書冊で、後編式、武徳安眠諸家大秘録と貼紙で記されているが、記年を欠く、すくなくとも元禄以前のものと推定される。

●石垣原大友義統と黒田如水取合——原本は恒本言雄の筆写本で、その原本は不明である、表紙に「黒田如水石垣原軍記」と記されており縦23.8糎、横16.3糎の書級である。

●豊州石垣原合戦——この書は、武石繁次氏の筆写本で、筆者（武石氏）がペン書きしたものであり、その原本は、光岡村文字渡里旧庄屋長野国夫氏が所蔵していたものであるが、本文末尾に、「此書は、豊後国に伝わりたる記録に出たりとて、彼国速見郡由布院の処士溝口氏が方より頃日ひび送りたり、正説なるにや、おぼつかなし」と記されている。

内容は、石垣原合戦を中心にして、当時の黒田家の動行、大閩の朝鮮出陣と豊後武士の活躍、石垣原合戦後の論功行賞等についても記されており、石垣原合戦をめぐる、歴史的背景をしるため参考となる軍記である。

### (四) まとめ

以上簡単ながら、石垣原合戦の歴史的意義・舞台にあらわれた人物像・古戦場・史料（軍記）などについて、その概略を記したが、ここではつくせない数多くのものがまだ残っている。それらについては、別の機会にゆずりたい。（別府市教委 学校教育課 指導主事）



# 市指定記念物 千辛万苦之場

別府市立図書館長 佐藤 村 夫

## 〔1〕 井上聞多の潜伏生活 (107年前)

下関からの船便で、春山花助と名乗る男がおりた。そして温泉宿若彦の離れ二階の上部屋に落着いたのは慶応元年2月半であった。勤王の志士井上聞多が、山口城下の袖解橋で凶刃にあい、九死に一生をえて、別府温泉に亡命し、疵を養いつつ忍従の生活がこの部屋ではじまった。大楠の根もとに湧く共同温泉(楠湯)に毎晩遅く人目をさけての入浴。灘亀親分のもとに身をよせ、博徒に身を落したり、土方稼ぎのくらし。俠商彦七の庇護と同情を受けながら、給仕役の次女ハツの手から毎日渡される一枚の天保銭。こうした困難な生活の中であって彼は豊後の特産ショウガの畑や、七島ゐのたんば、砂浜の続く海岸、砂湯に集る村人、など、毎日この部屋から眺めながら、同じ温泉町の懐しい湯田、また風雲急を告げる長州に、想いをはせたことであろう。

## 〔2〕 思い出の部屋 九号室(61年前)

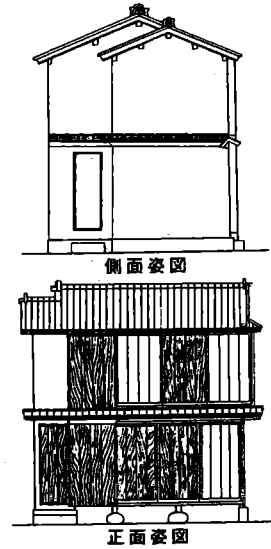
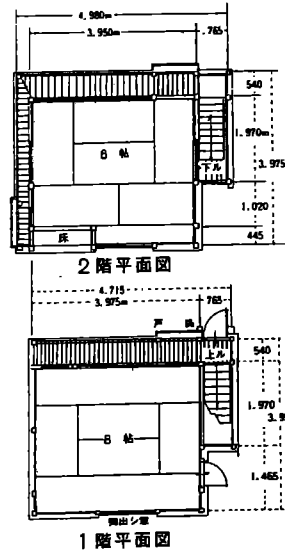
維新政府の誕生、十年戦役、日清日露の戦争と相つづく大問題と多忙のうちに歳月は流れた。あれから47年たった明治44年5月30日、かつての花助は元勲井上馨侯爵として、お礼のために若松屋を訪ねた。孫の当主亀四郎をはじめ、長女キヌ、次女ハツ、亀四郎の姉婿数馬、キヌの夫和田彦蔵らが、昔のままの2階6畳の部屋で、昔を懐しむ侯を迎えて劇的な対面となった。旅館街の発展で田も畑も海も見えなくなった周囲を残念そうに眺めた井上侯は、往事を追想して感慨無量、筆をとり書を残され「千辛万苦之場」と名付った。若松屋の家族と侯爵との記念写真に当時を偲ぶことができる

## 〔3〕 郷土史の遺跡に (39年前)

大正の初め市区改正にあたり、若松屋は家宝である潜伏家屋と記念の品を別府市に寄附し、永遠に保存したいと申し出た。早速別府市は井上侯ゆかりの地である公



▲井上侯を囲む若松屋の家族



▲家屋「千辛万苦之場」

会堂敷地内(往時の麻生別荘五六庵)に移築した。更に記念碑を建設して由緒をのべ保存することになった、昭和8年6月のことであった。

## 〔4〕 別府市の文化財に指定 (11~4年前)

昭和36年、図書館新築にともない現在の場所に再び移築される運命になったが、2回の移転をへても、なお昔のまま保存されたことは幸いであった。昭和43年1月29日には家屋を記念物として文化財に指定された、

引続き昭和44年には内外の大修理が行われたが、資料に基いて復元をした。瓦なども現在あるの日本瓦よりも更にひとまわり小形で、現物の入手は非常に困難であった。欄干、格座間、戸、障子、雨戸、畳から部屋のようすまで細心の注意を拂って復元に努力した。

## 〔5〕 江戸時代の旅籠屋

江戸末期に建てられ(安政2年の造築と言われている)約120年の別府の歴史を秘めたこの温泉宿の客室も当時は豪華な部屋であつたらしい。現在では別府温泉に残る唯一の旅館であり、江戸末期の町屋でもある。

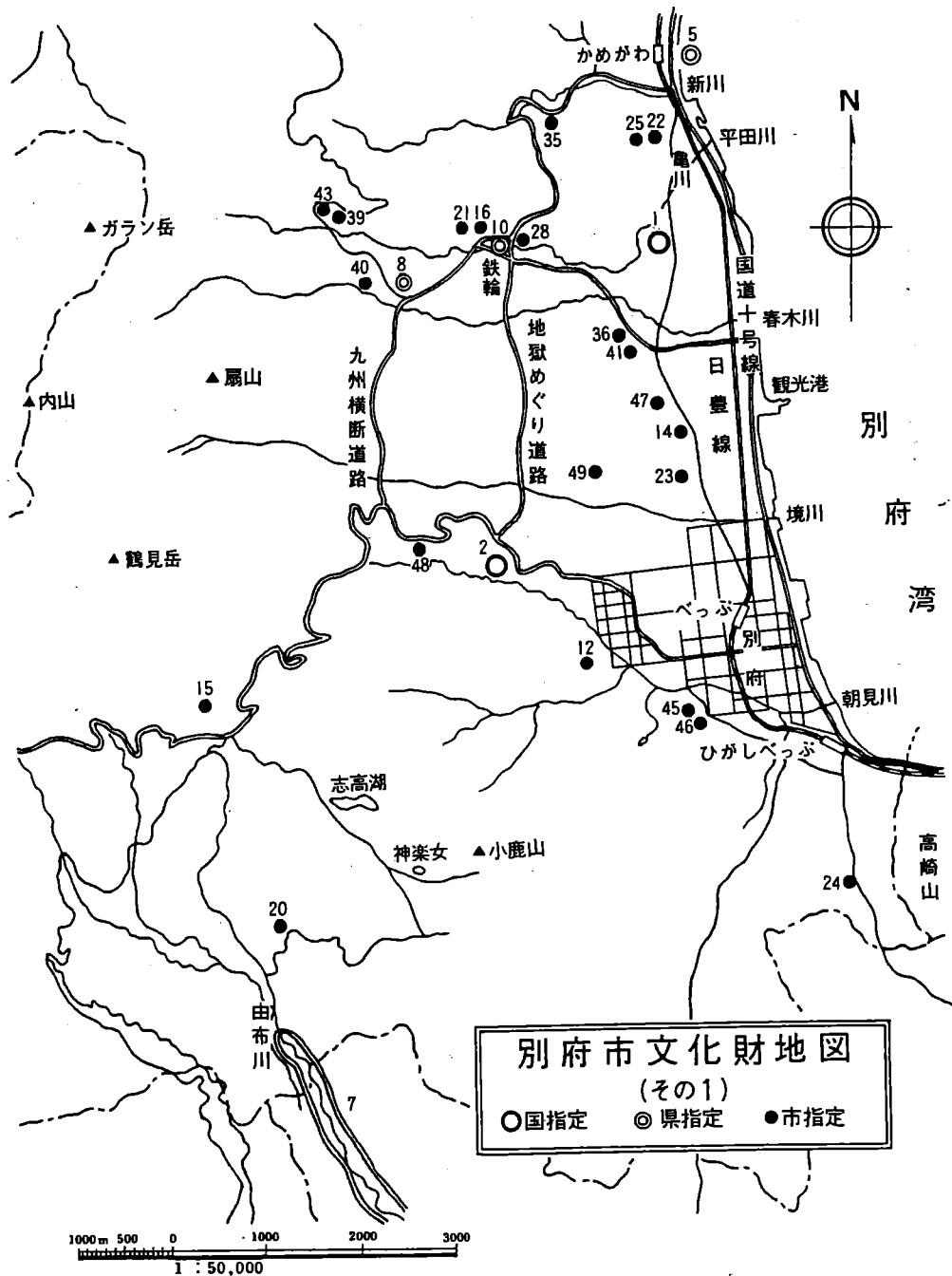
建物は土蔵造りの塗屋で、軒裏部分まで白壁で仕舞われており、簡素な感じを与えている。二階に上る階段も巾は狭く、踏み面やけあげも小さい。井上侯ゆかりの部屋は階上6畳の一室で、向って右が床になっており、左は半窓で勿論天井が低い。障子の外は床の横から折り廻しの2尺ばかりの椽となっていて、前方に低い欄干がめぐらせてある。その外側は勿論雨戸で、3枚の雨戸は昼間は両方の戸袋におさまるようになっている。

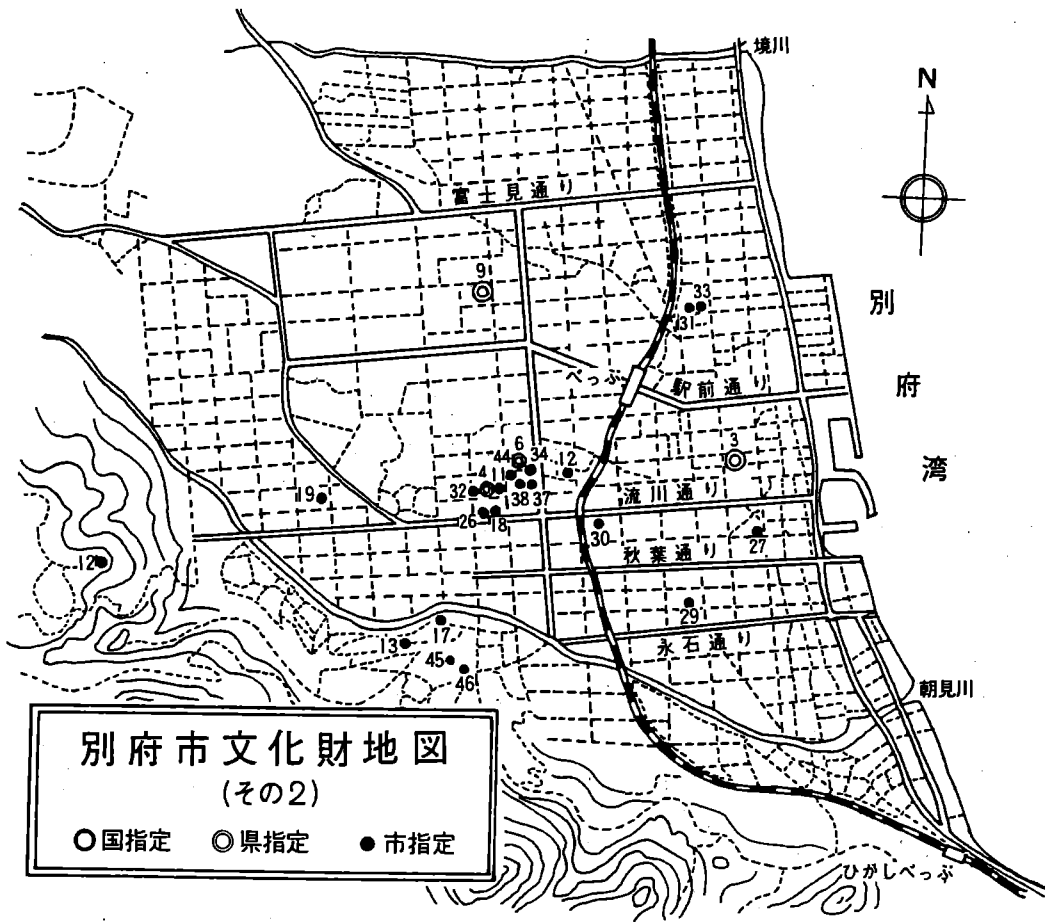
参考資料 福田築城 別府に於ける江戸時代の民家  
別府市 別府潜伏時代及其前後の井上侯  
別府市 別府市誌  
是永勉 別府今昔 など

# 別府市に所在する文化財一覽表 (昭和47年度)

番号	指定区分	名称又は物件	指定種類	所在地	所有者	指定年
1	国指定	鬼の岩屋 古墳	史跡	北石垣・上人小学校	別府市	昭32
2	国指定	木造 獅子・象	彫刻	観海寺スギノイ美術館	杉乃井ホテル	昭29
3	県指定	脇差 (肥前国忠吉)	工芸品	元町 4-4	豊田文一	昭28
4	県指定	鍔 兜	工芸品	上田ノ湯町 5-8	安部雅也	昭30
5	県指定	短 刀	工芸品	亀川浜田4組	朝倉 齊	昭46
6	県指定	唐草紋透彫 鏡板	考古資料	上田ノ湯町6-37	別府市教育委員会	昭34
7	県指定	由布川 溪谷	名勝	東山・(朴木内成・詰)	別府市 (挾間町)	昭34
8	県指定	鶴見の 坊主地獄	天然記念物	鶴見・小倉6組	甲斐 竜二	昭34
9	県指定	徳永邸 笠塔婆	建造物	西野口町5-30	徳永 常一郎	昭46
10	県指定	白池地獄 国東塔	建造物	鉄輪5組 (白池地獄)	加藤 知孝	昭46
11	市指定	源氏物語 写本	典籍	上田ノ湯町5-8	安部雅也	昭42
12	市指定	吉祥寺跡 及 開山塔	史跡及建造物	乙原ラクテンチ・乙原2組	御手洗 辰雄	昭42
13	市指定	見地改書	古文書(書跡)	朝見町3丁目 3-22	大野 定一	昭42
14	市指定	対岳楼 教則	古文書(書跡)	南石垣 1組	矢田 保	昭42
15	市指定	元かう 宝塔	建造物	東山1区 1組	田中 勝章	昭42
16	市指定	板 碑	建造物	鉄輪御幸6組 (神和苑)	古谷 元佑	昭42
17	市指定	板 碑	建造物	朝見町3丁目 1-8	神 爛二	昭42
18	市指定	宝 塔	建造物	上田ノ湯町 2-4	森 進一郎	昭42
19	市指定	宝 篋 印 塔	建造物	中島町 19-30	日本電々公社	昭42
20	市指定	宝 篋 印 塔	建造物	東山2区 1組	田原 寧	昭42
21	市指定	石 幢	建造物	鉄輪御幸6組 (神和苑)	古谷 元佑	昭42
22	市指定	経蔵内に包蔵する輪藏	建造物	亀川中央町5組 (西光寺)	高橋 堯信	昭42
23	市指定	寛永 キリシタン塔	建造物	南石垣 8組	屋田 米太郎	昭42
24	市指定	石幢 (六地藏塔)	建造物	赤松 1組	首藤 輝夫	昭42
25	市指定	木彫 阿弥陀立像	彫刻	亀川中央町5組 (西光寺)	高橋 堯信	昭42
26	市指定	屏風 洛中洛外図絵	絵画	上田ノ湯町 2-6	林田 アサ子	昭42
27	市指定	仏 画	絵画	楠 町 6-21	岩尾 米造	昭42
28	市指定	絵 卷 物	絵画	鉄輪・風呂本1組 (永福寺)	河野 善行	昭42
29	市指定	敷島武鑑帖	絵画	末広町 2-8	河村 ヤス	昭42
30	市指定	打刀 大小拵	工芸品	秋葉町 9-23	山田 耕平	昭42
31	市指定	刀 (肥前 忠吉)	工芸品	駅前本町 10-29	阿部 義人	昭42
32	市指定	刀 (近江 忠広)	工芸品	上田ノ湯町 5-8	安部雅也	昭42
33	市指定	脇差 (山城 国包)	工芸品	駅前本町 10-29	阿部 義人	昭42
34	市指定	別府 古地図	地図	上田ノ湯町6-37	別府市教育委員会	昭42
35	市指定	竜巻地獄	自然現象	亀川野田 (竜巻地獄)	伊藤 勝基	昭42
36	市指定	小児かめ棺	考古資料(出土品)	実相寺 1組	鈴木 栄	昭42
37	市指定	小児かめ棺	考古資料(出土品)	上田ノ湯町 6-37	別府市教育委員会	昭42
38	市指定	壺・甌・碗・提瓶	考古資料(出土品)	上田ノ湯町 6-37	別府市教育委員会	昭42
39	市指定	明礬温泉・鉄明礬石	記念物(鉱物)	明凡 1組	岩瀬 佐智乃	昭42
40	市指定	照湯 小倉里	史跡	小倉区	小倉区共有	昭42
41	市指定	実相寺 遺跡	史跡	北石垣 春木	別府市	昭42
42	市指定	ピヤクシン	記念物(植物)	田ノ湯町 2-5	竹村 初枝	昭42
43	市指定	湯の花 採集法	無形文化財(技術)	明凡 1組	岩瀬 佐智乃	昭42

番号	指定区分	名称又は物件	指定種類	所在地	所有者	指定年
44	市指定	千辛万苦之場	記念物(家屋)	上田ノ湯町 6-37	別府市教育委員会	昭43
45	市指定	朝見神社林	記念物(植物)	朝見2丁目15-19	神 喜久男	昭43
46	市指定	朝見神社のクスノキ	記念物(植物)	朝見2丁目15-19	神 喜久男	昭43
47	市指定	吉弘統幸の墓	史 跡	鶴見下馬松(吉弘神社)	吉 弘 神 社	昭47
48	市指定	宗像掃部の墓	史 跡	南立石2区7組	荒 金 吉 夫	昭47
49	市指定	石垣原合戦・激戦地	史 跡	鶴見鶴見原(七ツ石公園)	別 府 市	昭47





表紙解説

横50cm、縦47cmの手漉紙に、赤青緑など七色刷りの繊細な版画で、貴重な郷土資料である。編集出版など期記されていないが、明治15年頃の波止場を中心とする別府村の面影がよく表現されている。由布・鶴見の々と麓の堀田・観海寺・上ノ田ノ湯など湯治場が遠望れ、朝見八幡社、鮎返りの滝も見られる。広々と続原野・耕地の手前に、別府小学校・北町・本町・中町南町と軒を列べた別府村があり、田の湯・不老の湯・湯その他旅籠の内湯まで、多くの温泉が表現されている。流川尻一帯は物産一覽所・別府会社・開商社などの賣店商店が集まり、千石船や西洋形蒸気に通うはしげ大八車をひく人など港は大変賑やかである。築港東西100間、南北80間の防波堤で囲まれ、長崎、

博多と共に当時九州に於ける三大波止場であって明治4年5月に完成された。1400両の大金を官借し、支拂いも共有地の売却や港銭収入で長い歳月をかけたという、別府村としては実に画期的な一大土木工事であった。別府発展の基礎を築いた功績を語りつつ、波止場は今も昔の面影をとどめている。棧橋はまだないが、満潮時には3間2尺の水深があり、西洋形汽船の花形の外輪船や帆船が輻湊し、帆樫林立の盛況であった。砂湯に集る客、のどかな陸引き漁、海神を祀る波止場神社、大阪まで3日がかりの船旅……実に悠長な懐しい時代である。(佐藤)

別府市文化財保護委員会報 第3号  
 発行日 昭和47年4月20日  
 発行者 別府市立図書館  
 別府市上田ノ湯町6-37  
 印刷者 合資会社 興栄社